

# アスペクトと局面動詞

呉 鐘 烈

## はじめに

従来、アスペクトに関する研究は、主に文法的アスペクトの面からなされ、アスペクトの体系のなかで、局面動詞が過程の内的な時間構造の表現にどのように関与しているのかといった点に関しては、あまり考察されてこなかった。つまり、語彙的アスペクト形式の一つである局面動詞と「～ている」形式のアスペクトとがどのように異なる意味を実現しながら文の中で有機的な関係をなしているのかという点の解明が不充分であった。

そこで、小論では、①局面動詞が「～ている」形と異なるかたちで時間と係わっている事実をどのように説明したらよいか、②局面動詞をアスペクトの体系のなかにどう位置づけたらよいか、③「～ている」形式と局面動詞とは如何なる有機的関係をなしながらアスペクチュアルな意味を実現しあっているのか、などの諸問題について考察する。

## 1. 局面動詞の性格について

アスペクトと局面動詞との関連を考察するために、まず局面動詞の性格について見ることにする。

局面動詞は「～ている」形とともにアスペクトの一形式であると見なされるが、それが「～ている」形と異なるかたちで時間と関わっていることは、多くの研究者によって指摘されている<sup>(註1)</sup>。

例えば、

- (1) 植物組織が泡を発して腐り始めた。
- (2) 強い風が吹き続けた。
- (3) その本は五十ページまで読み終った。

(1)の「腐り始める」は、腐った状態への変化の始まりの局面を、(2)の「吹き続ける」は、吹く状態の続きの局面を、(3)の「読み終る」は、読む動作の終りの局面を表す表現形式である。このように捉えると局面動詞とは、過程の内的時間構造における、開始・継続・終了という局面 (phase) を構成する表現形式であると言える<sup>(註2)</sup>。

つまり《本を読む》という動作は、いちいちの時間的な局面に分割されていないひとまとまりの動作であるが、これは、次のような時間的な局面に下位分割することができる。

《本を読み始める (開始) ↔本を読み続ける (継続) ↔本を読み終る (終了)》

また、

《本を読み始めている→本を読み続けている→本を読み終っている》  
のように「～ている」形として内部構造を具体化して表すことも可能である。

さらに、これらの語の内部における「開始」「継続」「終了」の局面を表す局面動詞は前項動詞の語彙の意味によって結合の可否が決定づけられたり、局面の質的規定である意味のあり方（その意味を実現する動詞の性格）を変えることもあり得る。こういった問題には、局面動詞が文レベル以前の語レベルの問題と絡んでいくつかの要因がからみ合っていると思われる。

## 2. 局面動詞を構成する前項動詞の意味特徴

一般に、動詞の表す動作・変化は過程であって、始まり、続き、終りの部分から成り立っている。つまり、一つの動作・変化は、時間の流れのなかに配置されている局面の継起として現れてくる。しかし、動詞のなかには、過程の始まりから終りまでを分割できない動詞もある。つまり、一つの動詞が過程性を持つか持たないか、また時間の流れに沿って分割できるかできないかは、その動詞の持つ語彙の意味特徴がこれに関係している。こうした動詞の語彙の意味特徴によって分類を試みた先行研究には金田一(1950)、鈴木(1976)、藤井(1976)などがあるが、それらは吉川(1976)に受け継がれて大きく修正され、「動詞+ている」の体系的な考察となった<sup>(註3)</sup>。

吉川(1976)は、アスペクトを表す形式とそれが実現する意味との関係に動詞自身の意味が大きく働いていることに着目し、アスペクトの諸形式の意味と語彙の意味との関連を見るなかで動詞の分類を試みている。氏のこのような分類は、特に「～ている」の意味が中心であった従来の分類に比べ、動詞の語彙の意味まで考慮に入れて分類を図っている点で評価できるが、分類自体が複雑すぎるのが最大の問題である。また、氏自らあとがきで明らかにしているように、局面動詞における前項動詞の意味特徴などが動詞の分類にどれだけ関与し、反映しているかといった点も明確でない。

そこで小論ではまず、この点、すなわち局面動詞における前項動詞の意味特徴、特に過程(process)を含むか含まないかに着目した分類を示す<sup>(註4)</sup>。

過程を表さない動詞とは、動作・変化を表さない動詞である。動作・変化過程を表す動詞の中にも、瞬間性の意味特徴を持つ動詞は、特別の構文的条件が整っていない限り動詞自体では過程を表し得ないと考えられる。さて、動詞は動作・変化の過程が想定されるか否かによって次のように二分される<sup>(註5)</sup>。

- I 過程性動詞
- ①動作過程を表すもの  
(例) 読む、書く、食べる、歩く、走る、洗う、飲む  
登る、見る、投げる、……………など。
  - ②変化過程を表すもの  
(例) 死ぬ、割れる、感じる、腐る、明ける、光る、輝く  
白む、消える、乾く、……………など。

II非過程性動詞 (例) そびえる、すぐれる、異なる、ある、いる、できる (可能) など。

一往、三つの局面に分割できる動詞には、それぞれの局面を表す動詞が後接でき、ある局面を表す動詞が後接できない場合は、その局面を取り出すことができないとすることができる。しかし、これはもちろん「\*失い終る」、「?輝き終る」などの場合のように、ある局面を表す動詞が後接できないからと言ってその局面が意識できないということまで意味するわけではない。つまり、ある局面を表す動詞が付くということは、その局面が取り出され得るということの意味するのである。言い換えると、例えば、動作過程を表す場合は三つの局面に分割できるので、それぞれの局面を取り出すことができるが、変化過程を表す動詞には必ずしもそうでないものが含まれる。例えば、始まりの局面は、非過程性動詞を除くと、ほとんどの動詞はこれを取り出すことができると言えるが、ある動詞は終りの局面を取り出しにくく(「光る、輝く」など)、またある動詞は続きと終りの局面を取り出しにくい(「明ける、白む」など)。過程性動詞の場合は動作・変化過程の局面が意識されるのに対して、非過程性動詞は、一般に動作・変化過程が意識されないといった違いが存在する<sup>(66)</sup>。

### 3. 局面動詞「～始める」と「～ている」との関係について

アスペクト形式として「する」と対立している「～ている」には、一般的に(a)動作事象が継続している場合(動作の継続)と(b)変化の結果を表す場合とがあることが認められ、この二つの意味が「～ている」形の中心的な意味であるとされる。例えば、次の(a)と(b)が「～ている」形の中心的意味になるわけである。

- (a) (5) テレビを見ている。
- (6) 3時から本を読んでいる。
- (b) (7) 公園にドングリが落ちている。
- (8) 市場には新品種の林檎が出ている。

奥田(1977)は、この(a)の意味と(b)の意味との違いをつくりだしているのは、動詞の語彙的意味特徴の違いであるとする。つまり、「～ている」形の中心的意味は、「継続」であるとし、「主体の動作をあらわす動詞」(継続動詞)の場合は(a)、「主体の変化をあらわす動詞」(瞬間動詞)の場合は(b)の意味が実現すると説明している。しかし、あらゆる用例がこれで説明できるわけではない。例えば、「見始める—見始めている」「読み始める—読み始めている」「落ち始める—落ち始めている」「出始める—出始めている」のような場合は、「する(完成相)—している(継続相)」の対立を持っているにも拘わらず、主体の動作と主体の変化では説明がつかない。「～ている」形(継続相)の意味は、動き(動作過程・変化過程)のなんらかの局面を状態化するわけであるから、上の「～始めている」形は、動作過程・変化過程がどういう局面に置かれているかを表すアスペクトの表現形式である。ということは、局面動詞に限っては、単純に主体がどうかということが問題になるのではなく、あくまで、動き(動作過程・変化過程)がどのような局面にあるかということが問題になるアスペクト形式だということである<sup>(67)</sup>。つまり、奥田

の説明に従えば、「見始める」「読み始める」「落ち始める」「出始める」などの局面動詞の場合、前項動詞が主体の動作を表す場合であれ、主体の変化を表す場合であれ、「～始める」は全体的として瞬間動詞と見なされ変化の結果を表すことになるが、むしろこれらの局面動詞の場合は、動作・変化の過程が始まっており、従って、その「～ている」形は動作・変化の過程が存続している状態として捉えられる。「～始める」形は前項動詞が動作過程・変化過程といった過程性を持つことが前提条件であって、それによって始まりの局面を取り出すことができるわけである。従って、局面動詞「～始める」形の後につく「～ている」形は、動作過程・変化過程の始まりによってもたらされた状態の存続を表すアスペクト形式であると考えられる。

これに対して、変化過程を表す動詞（瞬間動詞）の場合は、「猫が死んでいる」のように(b)変化過程の結果を表す意味になるので、「\*猫が死に始める—\*猫が死に始めている」のような文は成立しにくい。しかし、「猫が次々と死に始める—猫が次々と死に始めている」という文の場合は、「次々と」という副詞の付加によって過程性が生じてくる。このような例からもわかるように「～ている」形の意味は、前項動詞の語彙の意味からだけでなく、共起する動詞句、副詞など、文レベルの意味によっても決定される。

「～かけている」形の場合も、

- (9) パーティが始まっている。  
(10) パーティが始まりかけている。

(10)のように「パーティが始まる寸前の状態に達して、その状態が存続している」という意味を表す。つまり、パーティが始まろうとしている直前の状態であって、パーティがまだ始まったわけではない。次の例も同様であって、

- (11) 船が沈んでいる。  
(11') 船が沈みかけている。  
(12) 彼は縛られた手足を暖めようとする努力も、もうあきらめている。  
(12') 彼は縛られた手足を暖めようとする努力することも、もうあきらめかけている。

(11)(12)も(9)と同じく「変化の結果」を表すが、(11')は「沈む寸前の状態に達する」、(12')は「あきらめる寸前の状態まで至っている」という意味で、「変化過程の状態維持」の意味に解釈される。

「～かけている」形も、「～始めている」形と同様、副詞などとの共起関係によって、すなわち、文レベルの意味によって、「始まりの局面」、「変化過程の状態維持」といった差が生じることがある。

- (13) 余白が生じかけている。  
(13') 余白があちこち生じかけている。  
(14) 林檎が腐りかけている。  
(14') 林檎がぶよぶよと腐りかけている。

(13)(14)は変化の発生する寸前の状態が続いていることを意味するが、(13')(14')の「～かけている」は「あちこち」「ぶよぶよ」といった副詞と共起することによってすでに変化が

生じ始めていることを表す傾向が強い。

#### 4. 局面動詞「～続ける」と「～ている」との意味の違い

前節で、局面動詞「～始める」形と「～ている」形との関係について検討したので、次には同じく、局面動詞「～続ける」形と「～ている」形との関係を考えることにしたい。

言うまでもなく、「～続ける」形は、

- (15) ステラは何も言わず、タバコを吸い続けた。(星32)
- (16) アランは黙ってジャックをにらみつけただけで女の姿を眼で追い続ける。(カフェ80)
- (17) 電話のベルが鳴り続ける。(カフェ14)

のように、ある動作過程が継続することを表す。

また、「～ている」も、「する」と対立する文法的アスペクト形式であるため、アスペクト形式を持たない動詞(「する」、「～ている」のどちらか一方しかないもの、あるいは両方あるが対立しないもの)を除外した、ほとんどの動詞の持つ継続の意味を実現する。すなわち、継続の意味を実現する点で、両者は同義であるかもしれない。

しかし、「～続ける」形と「～ている」形とは、アスペクトの体系を異にしており、両者をまったく同等に見なすことはできない<sup>(18)</sup>。まず、「～続ける」形は語彙のカテゴリーであるため、その前項動詞は語彙の意味特徴によって制限を受ける点に注意しなければならない。例えば、

- (19) 窓から見える高速道路の車が、絶え間なく光の線を作り続けている。(星32)
- (20) 私に脅かされて、むりやりにここに呼び出されてからも、ずっと、言い続けていた。(愛154)
- (21) ステラはハイライトを吸い続けている。(星82)

のような例からも窺えるように、「～続ける」の前項動詞は、〈継続性〉という意味特徴を有する。ここでいう〈継続性〉とは、継続の局面を取り出すことができるという意味特徴で、そうした〈継続性〉を有する動詞には、「\*立ち始める」「\*座り始める」などのように一回的な動作では始まりの局面を取り出すことができなくても、「立ち続ける」「座り続ける」などのように「～続ける」形は可能な動詞が含まれる。変化の結果を表す動詞のあるものは、「\*死に続ける」「\*なくし続ける」「\*枯れ続ける」のように、特別の条件を持たない限り、「～続ける」形にはならない。

さらに、上の(15)～(21)の「～続ける」形は、「～ている」形と同じく基本的には「動作事象の継続」を表しているが、例文(15)～(17)のような「～続ける」形は、動作過程が継続することを表しており、(19)～(21)の「～続けている」形は、「作り続ける」「言い続ける」「吸い続ける」という動作が存続している状態を表す。そのため、「～続ける」形と「～ている」形とを置き換えると文意が変わる場合がある。例えば、

- (22) もう何日も前から繰り返しているクリスマス曲が変わらずに流れている。(星65)
- (23) 犬は同じ姿勢でいつまでも立っている。(星69)
- (24) それからかわらの下へもぐり込むが、羽はしばらくぶらさがっている。(夏9)

(25) お二人がそのことをきっとお嘆きになるだろうと思って、このように悲しんでいるのです。(夏82)

(22)(23)の場合は、「～ている」を「～続ける」に置き換えても文意に大きな違いは生じないが、例文(24)(25)の「～ている」形は、「～続ける」形に置き換えると不自然な感じになる。それは、「流れる」「立つ」などのように動作過程を表す動詞の場合、「～ている」形として動作が継続する状態にあることを表すが、「ぶらさがる」「悲しむ」などのように「～ている」形として変化の結果を表す場合は、「～続ける」形にはならないということであろう。つまり、「～続ける」形は、まさに継続という意味ながら結果にはなり得ないことである。

## 5. 局面動詞と「～ている」との関係について

以上のような事実に基づいて、局面動詞「～続ける」と「～ている」との関係についてまとめると次のようになるだろう。完成相「する」が過程における動作・変化の過程を局面に分割しないでひとまとまりとして捉えているとすると、継続相「～ている」は、過程における動作・変化の過程を一定の時間関係のなかにおいて、「動作の継続」のなかにあるか、あるいは「変化の結果」のなかにあるかを問題にしている。つまり、「する」と「～ている」とは形態的に対立している文法的アスペクト形式である。

一方、局面動詞は、動詞の語彙的意味のなかにある時間的性質を特定の局面に分割して指し示す動詞であって、「する—している」の対立をなしているアスペクト形式とは質的に異なるアスペクト形式である。しかも、局面動詞「～続ける」形と文法的アスペクト形式の「～ている」形は、意味的な面では、持続するとか継続するとかのように同義の意味合いに解釈しがちであるが、「～ている」が「する」と形態的に対立する文法的アスペクト形式として状態の存続を表すのに対し、「～続ける」形は、その動作事象が続くことを表す語彙的アスペクト形式として、継続の局面を表していることから、アスペクトの体系を異にしていると言えよう。このような事実は、次のような例からも確認されよう。

(26) さっきから立ち続けている。

(26)' さっきから立っている。

(27) 一時から三時まで読み続けている。

(27)' 一時から三時まで読んでいる。

これらの「～続ける」形と「～ている」形は意味実現のされ方が違っている。(26)の場合は、「立つ」という動作が以前からずっと続いている局面を表す意味であり、(26)'の場合は、時間の長さを見捨て、ただ「立つ」動作が発話点において存続しているという意味として捉えられる。一方、(27)と(27)'は、3時を基準に発話点以前の継続が前提になっていることは両方とも同じであるが、(27)は基準時間の間、休まずにずっと読むことを続けることを表すのに対し、(27)'は、必ずしも中断なく読み続けることを意味するものではない<sup>(49)</sup>。つまり、言い方を換えれば「～ている」形はある期間中どの局面を切り取っても同じ状

態であることを示すのに対し、「～続ける」形は未来の特定の局面が、その一つ前の局面と同質（一つ一つの動作の集合）であることを示すと言える。

さらに、このような事実は、「～終る」形と「～終わっている」形にも見られる。

(28) テレビのお笑い番組を見ながら冷やし中華をすすり、皿を洗い終った。(星77)

(29) 溜っていたビデオを見終ると、僕にはもうすることがなかった。(星86)

(30) 本はすでに3時に読み終っている。(星101)

(31) 太郎はすでにライスカレーを食べ終っていた。(坊100)

(28)と(29)の「洗い終る」「見終る」形などの「～終る」形は、それぞれ従属節と主節の出来事には無関心であって、ただ動作事象の終りの局面を捉えているのに対し、例文(30)と(31)の「読み終っている」「食べ終っている」の「～終わっている」形は、「本はすでに3時に読み終った」「ライスカレーはすでに食べ終った」という「終りの局面の状態存続」を表す表現形式である。

### おわりに

以上、局面動詞と「～ている」形との関係を中心に、意味実現のされ方を考察した。

最後に、なぜ同じ文脈の条件の下で、ある時は「～ている」形、ある時は「～続けている」形として捉えられているのかを考えてみたい。ここで、まず、考えられるのは、「～ている」形と「～続ける」形の両形の間には、意味実現に対する評価の違いがあるということであろう。「～ている」形が、ある動作過程・変化過程の状態存続（動作の継続のなかにあるか、あるいは変化の結果の継続のなかにあるか）を問題にするアスペクト形式であるのに対して、局面動詞「～続ける」形は、過程における動作事象が継続することを表す表現形式である。つまり、「～ている」形が「する」形と対立する形で、形態的な対立が表すアスペクト的な意味を実現する文法的アスペクト形式であるのに対し、「～始める」「～続ける」「～終る」形などの局面動詞は、文法的アスペクト形式とは質的に異なるものとして、動詞の語彙の意味のなかにある時間的性質と関わったの展開局面を表す語彙的アスペクト形式だと言える。このような面からも、局面動詞は今後、さらに独自の性格による位置づけおよび研究が進められなければならないと思う。

### 注及び参考文献

注1 奥田(1988)、鈴木(1986)、高橋(1986)などを参照されたい。

2 局面という用語は、奥田(1977)によるもので、局面動詞については、小田由美氏の一連の研究があるがいずれもガリ版ずりで、公表されている論文は、小田(1986)だけである。

なお、山田(1984、1988)では、これを「局相アスペクト」、「局面(phase)」とよんでいる。小論でも、この局面(phase)という用語を用いることにする。

3 吉川(1976)では、従来の研究を踏まえ、「している」の意味とそれの実現する条件のところ、「している」形は次の事柄を表すとし、(1)動作・作用の継続 (2)動作・作用の結果の状態 (3)単なる状態 (4)経験 (5)繰り返しなどの五つの項目を挙げ、「している」の意味は基本的には(1)と(2)の二つであると述べている。小論では、五つの項目のうち、(1)と(2)の基本的な意味を中心に考察を行う。

4 金田一編(1976)の所収のところ、鈴木氏は、動作動詞を(イ)継続動作性動詞と(ロ)瞬間動作性動詞とにわけ、(イ)は、状態の変化とともに、そのプロセスが問題となる動きを表す動詞であり、(ロ)は、変化だけが問題となる動きを表す動詞であると定義している。

〈過程性〉という意味特徴は、ここから示唆を得た。一方、用語は森山(1988)に従ったものであるが、内容は必ずしも同じではない。

5 小論では、鈴木氏の動作性動詞を過程性動詞として捉え、さらに、その過程を動作過程・変化過程に分けた。また、動作過程・変化過程が想定されない場合、非過程性動詞として区別した。

一方、(注4)のところの(ロ)瞬間動作性動詞は、主体の変化を表す点から変化過程を表す動詞の中に入れた。しかし、変化過程を表す場合には、特別の構文的条件がつく場合があり得る。要するに、その変化過程が瞬間に終わってしまう「死ぬ」「消える」などの動詞と、身体の姿勢変化を表す「座る」「起きる」「立つ」などの動詞は、複数の主体事象あるいは連続的な事象を支えてくれる副詞的修飾成分などの共起が条件になる。

6 ここでいう非過程性動詞とは、従来単なる状態を表す動詞や状態動詞と名付けられた動詞を指す。

7 森山(1988)に指摘があるように、単純に主体が変化するかどうかということが問題になるのではなく、過程性を持つか持たないかによるものであると考えられる。

8 例えば、次のような例の場合、「太郎はふと立ち止まった。」

(a)\*しかしすぐ歩いていた。

(b)しかしすぐ歩き続けた。

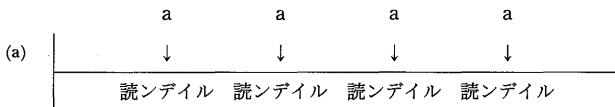
のように同じ「継続」でも「ている」と「続ける」とでは異なる。

9 例(7)の場合、例えば、一時から三時までの間、

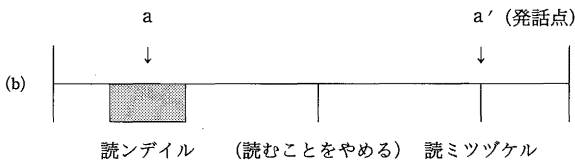
(a)\*彼は、一旦読むのをやめて、また読んでいる。

(b)彼は、一旦読むのをやめて、また読み続けた。

のように(a)「～ている」形の場合は、



期間中(一時から三時まで)、どの局面を切り取っても同じ状態であることを表すのに対し、(b)「～続ける」形の場合は、



「(a)、(a)は対象とする局面を指す。」

そこで示される動作(対象とする局面)がそれ以前の局面と同質であることそして、その動作を(ある場合は意図的に)行うことを表すものと考えられるが、「～ている」形は、読むのをやめたを含まない。

奥田靖雄(1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」宮城教育大学『教育国語国文』8号、  
「ことばの研究・序説」所収 むぎ書房。

(1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上・下)」(『教育国語』53、54号)「ことばの研究・序説」所収 むぎ書房。



- (1988) 「時間の表現(1)」『教育国語』94号、「時間の表現(2)」『教育国語』95号。  
 小田由美 (1986) 「局面動詞『～はじめる』について」横浜国大『国語研究』第4号。  
 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。  
 久野 暉・柴谷方良 (1989) 『日本語学の新展開』くろしお出版。  
 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」武蔵大『人文学会雑誌』13巻4号。  
 (1987) 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91号。  
 鈴木重幸 (1986) 「形態論的カテゴリーとしてのアスペクトについて」  
 『金田一春彦博士古希記念論文集第一巻国語学』所収 三省堂。  
 高橋太郎 (1986) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版。  
 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版。  
 バーナードコムリ、山田小枝訳 (1988) 『アスペクト』むぎ書房。  
 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク。  
 森山卓朗 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院。  
 山田小枝 (1984) 『アスペクト論』三修社。  
 吉川武時 (1976) 「現代日本語のアスペクトの研究」(金田一春彦編1976再録) むぎ書房。

本稿では、次の小説から用例を採集した。

(年代)	(作家名)	(作品名)	(出典)	(略号)
1975	源氏 鶏太	坊ちゃん社員	講談社	(坊)
1986	林 真理子	星影のステラ	講談社	(星)
1986	藤堂志津子	熟れてゆく夏	文芸春秋	(夏)
1988	森 揺子	カフェ・オリエンタル	講談社	(カフェ)
1989	藤本ひとみ	愛をかたるエリニュース	集英社文庫	(愛)

※ 出典明記がない用例は筆者の作例である。

#### 【付 記】

本稿は、1992年筑波大学国語国文学会第16回大会において発表したものをもとに加筆修正したものである。修正に際しては、北原保雄・林史典・矢沢真人先生に貴重な御教示を頂きました。記して感謝の意を表します。

(筑波大学大学院文芸・言語研究科日本語学)